



命をつなぐ共助の力

—山陽小野田市セーフティネットワークの挑戦

山口県山陽小野田市セーフティネットワーク
会長 岡本 志俊



1 はじめに

災害は、いつ、どこで、誰を襲うか分かりません。だからこそ、私たちは「備える」だけでなく、地域でつながる「絆」が重要と考えています。

私たち、「山陽小野田市セーフティネットワーク」は、平成25年に設立した山口県山陽小野田市に所在する自治会単位の自主防災組織や防災士協会、各地区の地域運営組織から構成される防災組織の連合体となります。現在では市内世帯の95%がこのネットワークに所属しており、日々、地域の防災力を高めるため、自助・共助の仕組みを築いています。

この団体が生まれた背景には、全国各地で多発していた自然災害、特に本市で発生した平成22年の厚狭川氾濫という激甚災害があります。さらに平成23年の東日本大震災を契機に、単独の自主防災組織では限界があることを痛感し、そして広域での連携と自助・共助の必要性を強く認識したことがあります。

2 セーフティネットワークの取組

高齢化が進む本市では、次世代への引き継ぎも急務です。こうした課題に真正面から向き合い、持続可能な防災支援体制を構築するために、山陽小野田市セーフティネットワークは立ち上がりました。

我々の活動は、多岐にわたります。毎年開催される「防災フォーラム」では、大学教授や防災実務者などの有識者を招き、地域の防災リーダーや防災士、学校関係者、企業の担当者が一堂に会し、最新の防災知識や事例を



毎年開催している防災フォーラム

学び合います。令和7年度で13回目を迎えたこのフォーラムは、毎年会場を満員とし、市民の防災への関心の高さを物語っています。

また、各地域交流センターでは「防災講座」や「地区防災訓練」が定期的に行われ、地域の防災リーダー育成に力を注いでいます。さらに、小学校区単位での避難所運営等の地区防災訓練も毎年1回は実施しており、行政と教育委員会及び地域が一体となって防災・減災に取り組んでいます。

特筆すべきは、次世代への防災教育です。市内の小中学校では、児童・生徒を対象に「防災標語コンクール」を毎年実施しており、当初は夏休みの宿題として始まったこの取組も、今では授業の一環として定着し、応募数は年々増加し、対象児童生徒の約6割が参加するまでになりました。子どもたちが自ら防災を考え、言葉にすることで、地域全体の意識が高まっています。

「隣のおばあちゃんの家、無事だった？」

これは、令和5年度の地区の避難所運営訓練で交わされた、ある中学生の言葉です。令和2年から始まった「防災標語コンクール」などの防災教育により、災害時には「誰かが



防災訓練 1



防災訓練 3



防災訓練 2



防災マップ作成のまち歩き

助けてくれる」ではなく、「自分が誰かを守る」という意識が児童生徒の中にも根付き始めていると確信できる出来事でした。

さらに、セーフティネットワークでは「わが町の防災マップ」や「避難所運営マニュアル」の作成支援、防災資機材の貸出など、地域の実践的な防災活動を後押ししています。「この道は、車いすでは通れない」といった課題が見つかるなど、これらの取組は、単なる知識の提供にとどまらず、「自分たちの街を、自分たちで守る」という意識を育てています。

また、防災活動だけではなく、地域のお祭りやイベントも合わせて実施することで地域での絆を深めています。

3 結びに

防災は、「公助」を担う行政だけでは成り立ちません。「自分の命は自分で守る、地域の安全は地域で創る」を合言葉に、隣人との声かけやあいさつ、地域のイベントへの参加、行政や学校との連携——こうした日常の



お祭りでの炊き出し訓練

つながりが、いざというときの命綱になります。山陽小野田市セーフティネットワークは、自助・共助の力を信じ、助け合い支え合いの地域の絆を深めながら、災害に強いまちづくりを進めています。

終わりに全国の皆さん、どうかこの取組を一例として、あなたの地域でも「つながりによる防災」を始めてみてください。共助は、誰かを助けるだけでなく、自分自身を守る力にもなります。私たちの取組が、皆さんの防災活動の一助となり、みんなでつくる未来への備えになると信じています。